

令和5年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査

札幌市における結果のまとめ

【分析のまとめ】

- 小中学校男女ともに、ほとんどの種目で全国平均に届いていない状況であり、特に中学校の女子は全国平均との差が顕著である。
- 体力合計点の改善傾向は、コロナ禍の影響による行動制限が徐々に緩和され、児童生徒の運動の実施がもとに戻ってきたことで、体育・保健体育の授業の中での運動量が増加したことが要因であると推察される。
- 体育・保健体育の授業に対する意識においては、「運動やスポーツが好き」と考えている児童生徒ほど、体力合計点が高く1週間の総運動時間も高い傾向にあり、「卒業しても運動したい」には強い相関があったことから、生涯に渡る運動習慣の形成に向けて大切な指標である。
- 1週間の総運動時間を延ばすためには、目標を立てて運動をする等の主体性と体育と保健との一層の関連を図った授業を計画し、健康の保持増進の大切さを実感した上で運動習慣へ関連付けて運動やスポーツを実施することが大切である。
- 運動が嫌い・やや嫌いと考えている児童生徒が、今後どのようなことがあれば運動したくなるかという分析結果に着目して具体的な取組につなげることが重要である。

【課題】

- 体力の向上を図ることや、子どもが主体的に運動やスポーツに親しむためには、保健体育等の授業の充実はもとより、体育の授業以外でも児童生徒が運動やスポーツの楽しさや喜びを味わえるような工夫や環境づくりが求められる。
- 具体的には、「仲間」「時間」「空間」いわゆる三間（さんま）の創出により運動機会の充実を図る取組が重要であり、それに加え、子どもが運動を上手くできたと実感できたり、自分に合ったスポーツを見付けられたりできるよう、子どもが主体的に授業以外で運動機会を創出する取組を立案し、それを実現していく経験を得られるような取組が求められる。

【今後に向けて】

- 運動の楽しさに触れられる「課題探究的な学習」の充実を図るとともに、授業を通して実感した運動の楽しさを授業以外での運動習慣の形成につなげる取組を推進する。
- 健康の保持増進に運動が果たす意義についての理解促進を図るとともに、健康の保持増進の大切さを実感した上で運動習慣へ関連付けるなど、保健教育の充実を通して、運動機会の形成へとつなげる取組を推進する。
- 札幌らしいコミュニティ・スクールの仕組みを活用し、家庭・地域との連携を図ることで三間（さんま）を創出するとともに、子どもの思いや願いを実現していくさっぽろっ子「自治的な活動」と関連付けて、子ども自身による運動機会を創出する取組の立案・実現に向けた取組に力点を置く。